

定朝法橋敘任の経緯

——歴世木佛師研究の一節——

谷 信 一

本誌第四拾八號に「定朝論の序としての康尙傳」なる一文を草して、康尙生涯中に於ける主な行蹟を調らべ、その生存の下限を寛仁四年までに推證し、併せて、そのことから考へ及ぼされる定朝との關係に就いての抽象論に觸れたことがある。それに續いて定朝に關する繼稿を掲げようと思ふのであるが、これを文獻上からと作品上からと併せて論究してゆくならば、一篇の論説として纏めることは既に量的にも決して容易な業ではない。そこで、たゞこゝでは題記のやうな方面だけに限つて述べて、その初編としたい。

一 敘任日の二説

定朝が法橋上人位に敘せられたのは、治安二年七月十四日に供養せられた法成寺金堂及五大堂の諸像造顯に對する勸賞であつたことは既に周知のことである。而してこれが木佛師の僧位獲得の初例として重要な意義をもつことも亦同じく一般に認められてゐる（註）。それにも拘らず、その敘任の日附に就いては未だ必ずしも正確に認められてゐるとは言ひ得ないやうである。この日附の如きは枝葉の

問題であるが、しかし、一應は正確な史實の探求が必要であるからして、まづそのことから觸れてゆきたい。

いままでの諸史料を整理すると、その敘任の日時は、治安二年七月十四日と同十六日との二説に別けられるやうである。後世の編纂書の如きは暫らく別として、たとへ文學的作品であるにしても、その記述するところが多く史實と合致することによつて歴史史料としても價値のある、かの藤氏一門の公私に於ける榮華を主材とする『榮華物語』（樂）に於いては、

（金堂）
御堂供養、治安二年七月十四日と定めさせ給へれば、萬づを靜心無う、夜を晝に思し營ませ給ふ○中（十四日）今日の講師の山の座主は僧正に内より成させ給ふ、御佛仕うまつれる佛師定朝は法橋に成させ給ひつ、御堂造り仕うまつれる工人ども、位階賜はせ、様様の悦ども爲たり、殿の御前の涙は道理に見えさせ給へり、大方何れの人も、いみじうこそ思したりつれ○下略

と言つてゐて、供養當日の十四日に諸工人などと共に敘任せられてゐる記述ぶりである。また金堂供養に關する從來の唯一無二の根本

史料とせられてゐる『法成寺金堂供養記』はどうかと言へば、少し長文であるが、その状況を重憶するために取捨して掲げるに、

治安二年七月十四日壬午、天晴、此日入道太相國建立法成寺金堂五大大堂新佛開眼供養會也○中前一日、堂莊嚴○中當日寅刻發小音聲神分、同刻御佛開眼、卯刻分送諸僧法服○中巳二點打衆僧集會鐘○中午一點打行事鐘○中種々の行事作法と、こ次打金鼓、導師表白、其願文曰○中次咒願、其文曰○中の間に非常大赦あり、次給僧祿○中西剋、導師咒願下高座○中左右口發音樂、奏種々之舞○中管絃既了、鳳輦欲廻有御送物、珍既種々先有賞賜、大佛師定朝被敍法橋上人位、又越前守從四位下源朝臣濟被敍從四位上、因幡守正五位下豐原朝臣爲時敍從四位下已上二人、木工大工從五位下常道朝臣茂安被敍從五位上、修理少屬伊香豐高轉權少進人工也○中次大臣以下、祿法有差略丑刻事了退出

とある。これによれば、この供養は金堂と五大大堂の新佛開眼供養であるやうであるが、それと共に堂落慶供養を併せ行つてゐるものゝと解したい。さて當日寅刻(午前四時)に始まつて直ちに佛像開眼供養があり、主な行事は酉剋(午後六時)頃に至つて終了したやうである。しかし、「秋月漸く昇り、綠池淨かにして瑠璃の地の如く、清風和かにして旂檀の香を帶」びるに至るやうな時刻になつても未だ續いて、丑刻(午前二時)に及んで漸やく一晝夜に亙る大行事が終了したのである。この時、造堂の行事人や工人が昇敍せられたのと同じく、わが定朝は造像の大佛師としての恩賞のために、法橋上人位に敍せられたといふことを記してゐる。

以上が供養日の十四日説の最も代表的な史料であり、これに對して『初例抄』の如きは、

後一條
木佛師僧綱例

定朝 大佛師康成子、治安二ノ七月十六日叙法橋、法成寺金堂造佛供養日也、永承三年三月二日轉法眼、山階寺造佛賞、天喜五年八月一日入滅、凡外才者任僧綱以之爲初

と言つてゐる。こゝに十六日説が出るのであるが、しかしこれとも「供養日也」と註記してゐるところからみれば、この十六日説には積極性は少なく、十四日説との間に差別を求めることが困難であり、むしろ供養日を十六日と誤つてゐるものゝとも解釋せられなくもないとも言へるのである。

かういふ中にあつて、『僧綱補任』のみが、簡單ではあるが治安二年の裏書に、

大佛師定朝 七月十六日叙法橋、法成寺造佛賞、佛師僧綱始之

と言つて、これが十六日説の最も權威的な記録である(初例抄の如きは考へられる)。

この兩説を解決するものは、記録學的に言つても、當時の日乗であらねばならぬ。その唯一のものとして知られてゐるのは『左經記』だけであつて、曰く、

十四日壬午、天晴、已剋行幸法成寺養事也○中供養作法有別、有勅天下大赦云々、事了被賞造作々佛行事并大工等○中次有上達部殿上人祿大掛、供養所司衍疋絹、及子剋還宮

とあつて、作佛作堂の行事人や工人等の賞を記すも、定朝に就いては一言も觸れてゐない。その翌々十六日の條に至つて、

十六日甲申、天晴、佛師定朝、依造佛功任法橋

とある。こゝに於いて、先づ私は定朝法橋敍任日を以て十六日とな

す方に左祖しなければならぬ。

註「歷代皇記」法橋和泉在人、定朝治安二年叙法橋、法成寺金堂御佛賞

「如是院年代記」壬二藤相落慶法成寺、佛工定朝
戊二登綱位、工人綱位自朝始

「常光寺王代記并年代記」治安元年辛酉法成寺立佛、定朝造法成寺、佛甚
好也、任法橋上人位、工人綱位自朝始

「本朝大佛師正統系圖」一代六十八代後一條院、治安二壬戌年法成寺、
定朝工人綱位始也、同年十一月一日卒○下略

「本朝大佛師系圖」定朝佛慶元祖也、自是以前皆權作也、後一條院御宇、治
安二被成法橋位、工人綱位始也、同年十一月朔卒

「日域大佛師正統系圖」定朝日本工人綱位之始也

抑定朝は○中後一條院治安二年宣下ありて法橋上人位たまふ、これ本朝工人官位の
始となり、同年十一月朔日安座合掌して卒す。

「本朝大宮佛工正統系圖并末流」法橋位のことなし

以上四種の佛師系圖は、佛師系圖そのものは如何なるものであるか、而してそれが
如何なる種類に分化されてゆくか、といふことを紹介する一例として掲げた次第で
ある。而して歿年月の誤謬であることは言ふまでもない。

二 敘任の経緯

凡そ堂塔の落慶や佛像の開眼の供養と共に、工人等への勸賞・給
祿があるのが原則であるから（本誌第五二―五四號、拙稿）、この法成寺金
堂及五大堂の場合も、堂落慶供養と佛開眼供養の十四日に勸賞が行
はれるのが當然であらねばならぬ。また事實、その關係者は當日に
恩賞に與つてゐるのである。しかるに定朝のみが、翌々十六日に賞
を受けてゐるのは、慣習を破つた異例であらねばならない。逆に言
へば、そこに多くの書が供養當日の十四日説を記してゐる立場を、
一應は諒解せられるのである。

どうして、こんな異例を生じたのであるか。『左經記』の記すと

定朝法橋敘任の経緯

ころは、甚だ簡略で何等その間の事情に觸れてゐないし、また當然
筆録したであらう『小右記』は、この月日が缺脱したものとして傳
へられてきてゐる。ところが、その間の事情を解釋するに足る有力
な一文が『諸寺塔供養記』中に引用せられてゐるのを見出すのであ
る。而してこの一文の出典は、『小右記』の缺脱部分であることも知
られる。即ち、この『諸寺塔供養記』の文と『野府記』の名の下に
傳はる『小右記』の文と一致することが判るのである。

その新史料によれば、定朝法橋敘任は『左經記』の如く、十六日
説が正しく、しかも不明であつたところの異例を生じた這般の経緯
が、簡單ではあるが記載せられてゐるのである。繁雜で不用の部分
もあるが、その必要部分を掲げよう。

治安二年七月十四日午、今日供養法成寺金堂之内□、未明修誦於三个寺
清水、祇園、依可供奉行幸也、依禪閣御消息奉仰、前是講師天台座主權僧
賀茂下神宮寺、正源心打者高坏十二本、折敷懸變廿前大
破子六荷、手作布百段參内辰廻、召仰
有昨日、先是御輿候日花門外、
居平地、召外記仰可居文礼床之由、而御輿長駕輿丁事由、皆又同、近衛將
等事未參入者、准御齊會之宣旨事、而藏人右中辨章信朝臣未被仰左右者、
即參關白人事三番長、各一人、余申云、禪閣云、隨身事有勅書、又亦令外記仰左
右近府、勅書趣頗難候畢、令外記書下宜乎、禪閣云、尤佳事也、又前々有
例者、即起座居上達部座未大納言達群居、召大外記賴隆于廊下仰之後座禪
閣云、佛師貞朝可賞追事、只今思煩、其故者、彼所望在法橋、亦不可不賞、
何爲之、余答云、貞朝奉造數體大佛、可謂希代之勤、非常之賞可傍難歟、
禪閣有甘心氣、即被參御所、關白同參、諸卿下官内府暫候、寂而無事、夜
漏漸闌月花方鮮、仍兩人階前向御所邊、彼是卿相佇立、此間於御簾中、有
主上三后東宮御贈物等歟、左頭中將朝任傳勅云、越前守齊本可叙從四位上、

因幡守爲時可叙從四位下、大工茂安可叙從五位上、修理屬伊香豐高可加任少進者、佛所貞朝(師カ)可賞進而聊有所思食、追可被仰者、宛終還宮、有鈴奏無勅答、少納言良久不稱唯、仍仰可唯由、即稱唯後聞令略(十五)十六日甲申、藏人右中辨章信朝臣傳關白命云、造法成寺金堂佛等佛師定朝可叙法橋者、又云可有相撲召仰、今日以後至十八日之次不宣、十九日可有也、可參行者令申所勞、今朝不愈可誰參入之由畢、宣旨一枚下給宰相畢、明日三后姬宮尙侍令乘輦車拜見法成寺諸堂、關白内大臣諸卿東帶扈從、其後有說經曼陀羅供等略○下

その文意を解釋すると次のやうである。「道長はこの十四日には定朝を賞進せしめねばならないと思つてゐたが、定朝が希望してゐる賞は法橋にある、そうかと言つて是非賞を與へねばならないので、それで今思ひ煩つてゐる、といふ道長の言葉があつたので、そこで小野宮實資は、定朝は數體の大佛を造つて希代の勤功と言つてよいからして、この際その法橋敘任といふやうな非常の賞があつても、誰も謗難しないであらう、と答へた。この言葉に道長は満足氣な様子があつた。」こゝで、道長初め當時の人々がこの初例をなすべきことを肯定する程に定朝の功勞を認めてゐることを知り得る。この調子でゆけば、當日他の工人等と共に賞があるべき様子であるが、終に「定朝の賞進は少しく考へる所があるから追つて沙汰する」といふ保留の勅が傳へられるに至つて、行事人・木工等に先に初賞が出るに至つた。従つて、尙その裏面には、當局者が、この初例を決行するに就いて熟慮してゐたものと受取られる。かくして終にこの十四日には勅許を得られなかつた。その翌十五日にも下らなかつた。

この間に、定朝の運動などもあつたであらうことが想像されるが、とにかく、十六日に至つてその宣下があつたのである。『朝野群載』に載せる勅書といふものは、誤句があり全文ではないと思はれるにしても、その勅敍の言葉であらうか。曰く、

佛師定朝授法橋上人位狀 忠貞作

勅、神妙出情、佛像隨手、公代之遺跡、彌須之後身、宜授階級之殊、式勸工巧之道

と。この狀の作者といふ忠貞とは、前掲の『野府記』の下略の部分に於いても他の勅書を清書してゐる大内記忠貞その人であつて、従つて、この文も、意を得てゐないものであるが、そこに、その正當さが認められるものである。而して、佛師の僧位敘任に關する勅書を傳ふるものが、この初例である定朝の場合に於いてのみ遺存してゐることも亦、寔に偶然の幸ひと考へねばならない。

かくして、供養當日に他の工人が勸賞を蒙つてゐるのに、定朝だけが延引したといふ異例を生じたのは、所詮は、「非常の賞」を行ふための諸種の考慮に基くためであつた。換言すれば、佛師の僧位獲得の初例をなすに相應しい手續であつたとも言ひ得る。以上の如く、這般の事情を明らかにしたが、これによつて、敘任日を供養當日の十四日となす『法成寺金堂供養記』以下の諸書は當然、誤謬であるとしなければならぬ。

三 法 成 寺

定朝が法橋上人位を獲得する直接的な成績となつてゐるものは、言ふまでもなく法成寺金堂及五大堂の諸像造顯にあり、實資の言ふところの「數體の大佛」の製作にあるのである。そのことに及ぶ前に、少しく法成寺そのものに就いて記さねばならない。

この法成寺の濫觴は、道長の立願によつて寛仁四年三月廿二日に落慶供養された無量壽院にある（無量壽院供養記、御堂關白記、左經記、小右記、日本紀略、扶桑略記、榮華物語、大鏡、今等鏡）。道長は寛仁三年三月十八日、五十四歳で落飭入道し、當時既に

胸痛を患つて健康體ではなかつたのであつて、そこに本寺建立の一動機があるのであらうが、同年七月十六日に建立發願してその翌年の供養となつた。その後、域内に室倫子發願の西北院が翌寛仁五年十二月二日落慶供養され、次いでこの治安二年七月十四日供養の金堂及五大堂である。而して最初の無量壽院とは、九體の阿彌陀像等を安置する阿彌陀堂であつて、萬壽三年三月廿日に改造せられるのであるが、とにかくこの無量壽院に濫觴するものであつて、金堂等の供養數日前の治安二年七月十日に、法成寺と改號せられる。その後、諸堂塔が相繼いで造建せられるに至るが、終に天喜六年に祝融に見舞はれてその過半が焼亡するに至つた。その法成寺の諸堂塔建立の状態は別表の如くなる。

四 法成寺諸像と定朝

さて、この法成寺の諸堂が如何に輪換の美を極めたものであつたかは、『榮華物語』がこれを精しく描寫してゐるし、實に、當時の七大寺、十五大寺其他の何れにもまさりめでたきものであつたのである（大鏡第七）。そのことは、結局は堂内安置の佛像と堂莊嚴の壁畫との彫刻繪畫の精美であることであり、工人としての木佛師即ち定朝等や繪佛師等の巧麗を證するものであることに他ならないであらう。

——具體的には平等院鳳凰堂を以て、その片鱗を示すものとして想起すればよい——而して、道長はその多くを、こゝに住して、菟前阿彌陀堂に移つて、そこで彌陀の迎接を受くるに到つたのも亦、彼としては本望であつたことと推察せられる。

當面の定朝法橋敘任の問題としては、金堂及五大堂諸像造顯が動機をなしてゐるのである。しかしその前に寛仁四年三月廿二日に供養された無量壽院に於ける丈六阿彌陀像九體、觀音・勢至像二體、四天王像四體、計十五體の大像が造顯せられてゐる。これは誰の所作であるか。これこそ康尙の作品であると共に、定朝の参加によつて完成されたものである（本誌第四十八號、拙稿「定朝論の序としての康尙傳」参照）。ところが、この十五體は、寛仁四年二月廿七日に奉渡されたもので、それまでは道長の子、太上皇太后彰子の上東門第に假置されてゐたものである（日本紀略）。従つて、その造顯は當目以前のものであつて、こゝに康

尙の實際活動の最下限を求め、更に、定朝の法成寺關係の上限を求めるものである。而して、この場合には單に大小佛師に給祿があつただけにすぎなかつた。

その翌年治安元年十二月に道長室倫子願主となつて西北院供養があり、その翌年に至つて金堂及五大堂の供養があつて、こゝに定朝が法橋に敍せられるに至るのである。この金堂及五大堂佛製作者は定朝一人（擔當大佛師としての意）であるからして、既に康尙は歿してゐることは明らかであり、こゝに、康尙の下限を前述の如く寛仁四年に限ることは、當然の推理である。

金堂及五大堂の立柱は治安元年六月廿七日であるから、佛像製作もほゞその前後の時から始まるものと推察されるが、こゝで、定朝は、二丈二尺像一・二丈像五・丈六像四・九尺像六、計十六體の像を造顯した。『野府記』が「數體の大像」といふのは、これ等を包含するものであらうが、「大像」といふ當時からの用語例に準據するならば、二丈像以上が六體であるから、この場合の數體といふ言葉はまことに自然であるとも考へられる。

定朝は、直接的には、この十六體の諸像造顯の恩賞として法橋位を獲たのである。しかし、その前に康尙と共に、無量壽院の丈六阿彌陀像九體・一丈觀音勢至像二體・四天王像四體の十五體の製作に參割してをり、次いで寛仁四年四月廿八日供養の十齋堂の丈六大日像二體・藥師像以下六體——と推察されるもの——の製作は、康尙であるか、定朝であるかは判らないが、何れにしても定朝の存在を

除外して考へることは出来ない。更に寛仁四年以後から、この治安二年までの間に造建された西北院等の諸像は、恐らく定朝の手になるものであらうと考へねばならぬ。

その上に、この金堂・五大堂以後に竣工した諸堂塔、即ち、記録に現はれる範圍で佛像數量を指示できるものだけを掲げて、藥師堂・三昧堂・釋迦堂・東北院・新堂・八角堂の五堂と其他當然佛像が安置せられてゐなければならぬ諸堂塔の内にある諸佛は、定朝の在世中に建立されたものである限りは、まづその作品は定朝作といふことを假定しなければならぬ。それは、これらの諸堂の發願が道長・賴通・上東門院等の藤氏一門であり、それと定朝との無量壽院・金堂・五大堂佛に於ける關係から言つても、以後の製作は定朝その人に委託されなければならない。更に、記録上に於いて、定朝と同年代に於いて、定朝と類似の地位をもつ佛師を見出し得ないといふことによつても、そのことは妥當であるやうである。しかし、定朝が歿する天喜五年八月までに供養された諸堂、即ち天喜五年三月に供養された八角堂に至る諸像の製作者に關しては、不幸にして何れもその作者を史上に明らかにしてゐないのである。が、上に言つたやうに、それは定朝以外の作者を考慮する客觀的條件が存在しないのであるから、こゝに、定朝はその生涯を法成寺佛造顯に捧げたと言つてもよいであらう。その假定のもとに、法成寺諸像を列舉すれば——無量壽院・十齋堂を除いて、金堂から八角堂に至る佛體數——

出典

堂	佛	像	關係	年月日・事項	出典
無量壽院	丈六 金色 阿彌陀像 (一丈) 彩色 觀音勢至像 彩色 四大天王像	九 二 四	(寬仁三・三・廿一) 道長落防) 寬仁三・七・十六 道長阿彌陀堂發願 寬仁四・正・十九 (康尙晚年清水寺別當) 無量壽院上棟 寬仁四・二・十五 佛壇築 寬仁四・二・廿 鑄鐘 寬仁四・二・廿七 九體阿彌陀像奉渡 寬仁四・三・十八 鎮改鑄 寬仁四・三・廿二 供養(康尙生存證明下服)	19	小右記・日本紀略・榮華物語・大鏡 小右記 左經記・別稿 左經記 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・法成寺金堂供養記 左經記 左經記 左經記 左經記・左經記・日本紀略 扶桑略記・法成寺金堂供養記 左經記・三僧記類聚・天台座主記・山門堂舍記 小右記・朝野群載 金堂卜同 日本紀略・扶桑略記・榮華物語 百練抄 本稿本文 小右記 榮華物語 小右記・日本紀略・百練抄 扶桑略記・榮華物語 左經記・日本紀略 小右記 小右記 左經記 日本紀略・百練抄 扶桑略記・日本紀略 日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 榮華物語 左經記 左經記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 今鏡・東北院供養記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 左經記・扶桑略記・百練抄 左經記・中右記・日本紀略 百練抄・扶桑略記 左經記・扶桑略記・日本紀略 扶桑略記・百練抄・榮華物語・今鏡 奉記・寺門高僧記 扶桑略記 扶桑略記 別稿 中右記・扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄・榮華物語 定家朝臣記・扶桑略記・百練抄 山門堂舍記 定家朝臣記 定家朝臣記・百練抄・扶桑略記 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 伊呂波字類抄 別稿 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 扶桑略記 定家朝臣記・中右記扶桑略記・百練抄・榮華物語
壽院	丈六 金色 阿彌陀像 (一丈) 彩色 觀音勢至像 彩色 四大天王像	九 二 四	(寬仁三・三・廿一) 道長落防) 寬仁三・七・十六 道長阿彌陀堂發願 寬仁四・正・十九 (康尙晚年清水寺別當) 無量壽院上棟 寬仁四・二・十五 佛壇築 寬仁四・二・廿 鑄鐘 寬仁四・二・廿七 九體阿彌陀像奉渡 寬仁四・三・十八 鎮改鑄 寬仁四・三・廿二 供養(康尙生存證明下服)	20	小右記・日本紀略・榮華物語・大鏡 小右記 左經記・別稿 左經記 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・法成寺金堂供養記 左經記 左經記 左經記 左經記・左經記・日本紀略 扶桑略記・法成寺金堂供養記 左經記・三僧記類聚・天台座主記・山門堂舍記 小右記・朝野群載 金堂卜同 日本紀略・扶桑略記・榮華物語 百練抄 本稿本文 小右記 榮華物語 小右記・日本紀略・百練抄 扶桑略記・榮華物語 左經記・日本紀略 小右記 小右記 左經記 日本紀略・百練抄 扶桑略記・日本紀略 日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 榮華物語 左經記 左經記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 今鏡・東北院供養記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 左經記・扶桑略記・百練抄 左經記・中右記・日本紀略 百練抄・扶桑略記 左經記・扶桑略記・日本紀略 扶桑略記・百練抄・榮華物語・今鏡 奉記・寺門高僧記 扶桑略記 扶桑略記 別稿 中右記・扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄・榮華物語 定家朝臣記・扶桑略記・百練抄 山門堂舍記 定家朝臣記 定家朝臣記・百練抄・扶桑略記 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 伊呂波字類抄 別稿 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 扶桑略記 定家朝臣記・中右記扶桑略記・百練抄・榮華物語
經藏	三丈二尺 金色 大日像 三丈 金色 釋迦像 二丈 金色 釋迦像 二丈 金色 藥師像 二丈 金色 文珠像 二丈 金色 彌勒像 九尺 彩色 梵天帝釋像 九尺 彩色 梵天帝釋像 九尺 彩色 四大天王像	一 一 一 一 一 一 二 二 四	治安元・八・一 以前 (治安元・九・廿九) 順通高陽院造) 治安元・十二・二 供養 治安元・六・廿七 立柱 治安元・七・十五 上棟 治安二・七・十 法成寺卜改號 治安二・七・十三 堂莊嚴 治安二・七・十四 供養 (治安二・十一・廿四) 道長延曆寺佛供養) 治安四・七・九 大破 治安二・七・十四 供養 治安四・三・廿二 僧房燒亡 永承六・四・十六 倒ル (治安二・七・十六) 定朝法橋發) 治安二・六・八 長堂新石曳 治安四・三 佛像奉渡 治安四・六・廿六 供養	21	小右記・日本紀略・榮華物語・大鏡 小右記 左經記・別稿 左經記 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・法成寺金堂供養記 左經記 左經記 左經記 左經記・左經記・日本紀略 扶桑略記・法成寺金堂供養記 左經記・三僧記類聚・天台座主記・山門堂舍記 小右記・朝野群載 金堂卜同 日本紀略・扶桑略記・榮華物語 百練抄 本稿本文 小右記 榮華物語 小右記・日本紀略・百練抄 扶桑略記・榮華物語 左經記・日本紀略 小右記 小右記 左經記 日本紀略・百練抄 扶桑略記・日本紀略 日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 榮華物語 左經記 左經記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 今鏡・東北院供養記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 左經記・扶桑略記・百練抄 左經記・中右記・日本紀略 百練抄・扶桑略記 左經記・扶桑略記・日本紀略 扶桑略記・百練抄・榮華物語・今鏡 奉記・寺門高僧記 扶桑略記 扶桑略記 別稿 中右記・扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄・榮華物語 定家朝臣記・扶桑略記・百練抄 山門堂舍記 定家朝臣記 定家朝臣記・百練抄・扶桑略記 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 伊呂波字類抄 別稿 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 扶桑略記 定家朝臣記・中右記扶桑略記・百練抄・榮華物語
五大堂	二丈 彩色 不動像 丈六 四大尊像	一 四	治安二・七・十四 供養 治安四・三・廿二 僧房燒亡 永承六・四・十六 倒ル (治安二・七・十六) 定朝法橋發) 治安二・六・八 長堂新石曳 治安四・三 佛像奉渡 治安四・六・廿六 供養	22	小右記・日本紀略・榮華物語・大鏡 小右記 左經記・別稿 左經記 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・法成寺金堂供養記 左經記 左經記 左經記 左經記・左經記・日本紀略 扶桑略記・法成寺金堂供養記 左經記・三僧記類聚・天台座主記・山門堂舍記 小右記・朝野群載 金堂卜同 日本紀略・扶桑略記・榮華物語 百練抄 本稿本文 小右記 榮華物語 小右記・日本紀略・百練抄 扶桑略記・榮華物語 左經記・日本紀略 小右記 小右記 左經記 日本紀略・百練抄 扶桑略記・日本紀略 日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 榮華物語 左經記 左經記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 今鏡・東北院供養記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 左經記・扶桑略記・百練抄 左經記・中右記・日本紀略 百練抄・扶桑略記 左經記・扶桑略記・日本紀略 扶桑略記・百練抄・榮華物語・今鏡 奉記・寺門高僧記 扶桑略記 扶桑略記 別稿 中右記・扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄・榮華物語 定家朝臣記・扶桑略記・百練抄 山門堂舍記 定家朝臣記 定家朝臣記・百練抄・扶桑略記 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 伊呂波字類抄 別稿 扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄 扶桑略記 定家朝臣記・中右記扶桑略記・百練抄・榮華物語
藥師堂	丈六 金色 藥師像 丈六 金色 觀音像 一丈 彩色 日光月光像 (七尺八尺) 彩色 十二神將像	七 六 二 十二	治安二・六・八 長堂新石曳 治安四・三 佛像奉渡 治安四・六・廿六 供養	23	小右記・日本紀略・榮華物語・大鏡 小右記 左經記・別稿 左經記 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・日本紀略 左經記・法成寺金堂供養記 左經記 左經記 左經記 左經記・左經記・日本紀略 扶桑略記・法成寺金堂供養記 左經記・三僧記類聚・天台座主記・山門堂舍記 小右記・朝野群載 金堂卜同 日本紀略・扶桑略記・榮華物語 百練抄 本稿本文 小右記 榮華物語 小右記・日本紀略・百練抄 扶桑略記・榮華物語 左經記・日本紀略 小右記 小右記 左經記 日本紀略・百練抄 扶桑略記・日本紀略 日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 小右記・日本紀略・榮華物語 榮華物語 左經記 左經記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 今鏡・東北院供養記 日本紀略・扶桑略記・百練抄 左經記・扶桑略記・百練抄 左經記・中右記・日本紀略 百練抄・扶桑略記 左經記・扶桑略記・日本紀略 扶桑略記・百練抄・榮華物語・今鏡 奉記・寺門高僧記 扶桑略記 扶桑略記 別稿 中右記・扶桑略記・百練抄 扶桑略記・百練抄・榮華物語 定家朝臣記

、無量壽院觀音・勢至像は暦平二年十月十二日の復興された阿彌陀堂では、一丈であるから、當初もそうであらう（法成願寺増補）。
 一、十齋堂の佛像數量は不明であるが、承暦三年十一月五日の復興によれば、表示の如き諸像が安置せられてゐて、同じく當初もそうであつたであらう（法成願寺増補）。
 一、金堂の文殊・彌勒像は丈量等が不明とせられてゐるやうであるが、願文を併讀すれば、同じく二丈金色像と解せられる。
 一、金堂の梵天・帝釋・四天王像六體は供養記本文では金色であるが、願文や扶桑略記は彩色とあり、像の性質から言つても、彩色を是とすべきである。
 一、釋迦堂の等身釋迦像百體と諸書に記すも、榮華物語（玉のひ）では九十九體となして、中尊の丈六釋迦像と共に百體釋迦像を構成してゐるやうに記してゐるが、その方が正しいと思はれるから、暫らくそれに従ふ。
 一、釋迦堂には二王像があつたことを榮華物語（玉のひ）は記してゐるが、他書に出ないので暫らく採らず。
 一、三昧堂は十齋堂と共に寛仁四年四月廿八日に始めてゐるが、佛像安置が、萬壽二年十二月十二日とあるので（日本紀略）表の如くしたが、榮華物語（音）によつても、早くから出てゐて、そこには普賢像等があつたと推察されるやうである。
 一、藥師堂十二神將像は榮華物語（馬の）では、「身七尺ばかり」とある。
 一、表中の關係事項部の括弧のものは法成寺と無關係のもので、當時の造寺顯像關係の一部を摘録したのである。
 一、西洋數字は西暦一千零百年代を意味し、左へ間隔の如何を問はず數字毎に經過する。
 一、本表を始め本稿は、瀧善成氏の「四間寺・法性・法成寺の研究」（史邦三）に負ふところ多し。なほ、本表は定期全傳の時に精しく補正する豫定である。

三丈二尺像	一
二丈六尺像	一
二丈	五
一丈六尺像	二
一丈像	二
九尺像	六
八尺像	一二
六尺五寸・等身・六尺像	一〇七
不明像	四二

總計百九拾七體を數へることができる。その他に、記録以外の多くを豫想することができるし、また小像の如きものは特に多くあるものであらうが(註)、とにかく、この數量は、その天喜六年焼亡の時に傳ふる『扶桑略記』の「凡そ丈六佛像數十餘體、等身佛菩薩像百餘體、一時爲焼、見者流涙」とか、或は『榮華物語』(煙の)に「二月二十三日の夜、御堂焼けぬ、然ばかりめでたくおはします百體の釋迦、百體の觀音、阿彌陀の七佛藥師など、丈六の御佛達、火の中に燦めきて立たせ給へる、あさましく悲し」といふ記述と背馳しないものである。要するに、法成寺造營と定朝とは全く不可分の關係にあつたものと推定することができる。これらの詳しいことや、定朝の法成寺關係以外の事蹟は、定朝全傳の節にでも譲ることにしたいが、この定朝の諸像を多數に傳へた法成寺は、定朝が歿すると、半歳の後に殆んど全焼の運命に遭遇してしまつた(僅かに残れるものや、取出した佛像は後の復興に利用される)。

この焼亡の翌年、康平二年十月十二日に落慶供養される阿彌陀堂の再建を始めとして、その後數拾年の間に、往昔の諸堂塔が頼通・師實等によつて建立される。しかし、この時は既に定朝の時代ではない。けれども、その復興法成寺諸像は、定朝の次の時代を荷擔する佛師、それは定朝によつて直接に育成された佛師等によつて完成されるのであつて、従つて、そこには定朝の傳統と間接の精神が傳存するものとなさねばならない。

註 「榮華物語、疑」に「或時は六觀音を造らせ給ひ、或時は七佛藥師を造らせ給ひ、或時は八相淨道を描かせ給ひ、或時は九體の阿彌陀佛を造らせ給ふ、また十齋の佛を等身に造らせ給ひ、或時は百體の釋迦を造り、或時は千手觀音を造り、或時は一萬體の不動を造り、或時はまた金泥の一切經を書き、供養せさせ給ひ、或時は大威徳を描き、供養せさせ給ふ」は何れも法成寺關係と思はれる。

五 法橋敘任と定朝様式の意義

治安二年四月十六日、定朝は法成寺金堂・五大堂の拾數體の佛像顯造の功によつて、法橋上人位に敘せられた。而して、それは實にわが國の佛師といふ工人の僧位獲得の初例であることは、上に述べた如くである。

由來、わが國に佛教が、佛像が傳來してより、更に換言すれば造像技法並びにその體得者たる「造佛之工」が渡來した時から、所謂佛師史は創まるものとしなければならぬ。法隆寺金堂釋迦像に銘記を遺す司馬鞍首止利佛師や同廣目・多聞二天像に名を留むる作者の

如きは、その極初に於ける最も具體的な例である。わが上代造像史は、この時代から東大寺大佛造顯を頂點として最も隆盛の域に至つたのであつて、その裏面に多くの造佛工の存在を豫想することができし、その大佛の造顯者として大佛師國中連公麻呂・大鑄師高市眞國等の語を古記は傳へてゐる。しかも、この國中連公麻呂は從四位下に敘せられてゐて、奈良朝に於ける佛師の最高の位階の一例であるが、大佛師國中連公麻呂は技術者としての佛師の階級的名稱たる大佛師としての地位にあつたものであるかは依然として疑問である。しかし彼を純粹な造佛工と假定して、それが俗位をもつといふ現象は、平安朝に於いての造佛工定朝が僧位を得たといふことと相對的に理解せられる。この俗位の傳統は康尙（從五位下）にまで及んでゐるが、他方康尙は僧籍にあることが確認され、後には凡僧を以て清水寺別當（第十代）にもなつてゐる。而して更に定朝が清水寺で出家得度してゐるといふことはその傳統であらう。されば定朝の法橋敘任は形式的には在僧籍といふことで既に必要條件を得てゐるものと觀られ、たゞその契機をなすものを俟つにすぎないとも言ひ得る。それが、當代の貴族的佛教と、道長との親近と、法成寺金堂佛顯造とであらう。さて、法成寺は興福寺・法華寺・法性寺・楞嚴院・法興院・積善寺・平等院と共に、當代の代表的貴族たる藤原氏の氏寺である（江談抄、佛教二ノ五、竹内）。この藤原氏、この場合に道長の造寺起塔顯像の業に使役せられ、その恩賞に與ることは、道長の個人的意欲の表現者としての行賞を蒙ることである。また上掲『野府記』が

道長がそれに就いて熟慮してゐることを記すこと自身が、よりそれを明證してゐるとも言へる。けれどもこの法橋位は、定朝自身の積極的所望にあるやうであり、しかもそれを道長が許容するところに背景的な興味があるものとみななければならぬ。平安朝初期以來の佛師の技術家としての社會的地位がどうであつたかは、觀念的には凡その見當は建てることのできる。佛像に對する觀念と態度とが、その製作者佛師に對するものではない。他の手工業者と同類のものであつたことは明らかで、「工匠の物食ふこそいと怪しけれ」（枕草子）云々と言つてゐる態度が、佛師に對する一種の階級觀であつたと思はれる。この時代よりも適かに佛師の地位が向上したと思はれる鎌倉時代に於いてすら、その娘越前の悲惨な境遇を通じて佛師運慶の地位が想像され、なほ一般佛師の社會的地位が傳統的に固定してゐることが想像される（古今著聞集卷十六）。大佛師云々と造像銘を記することは、彼等の最も誇らかな精神の象徴的手段であつたと解釋せられなくもないほどである。それはそれとして、工匠としての屬性をもつ定朝の法橋位獲得を以て、當代佛師の社會的地位の階級的な自然的向上結果による產物、即ち佛師地位の自律的昇格の一つの代表的象徴と考へるのは速斷であるやうである。道長の權勢と信仰との、この場合は一種の藝術意欲の顯現者としての行賞といふ個人的な現實的な象徴としての意味であつたのであらうと解釋せられる。而してそれには、寛仁四年の無量壽院佛を最後として、道長の前半生の藝術意欲の顯現者康尙の效績が先行してゐるといふことも、定朝の場合に、

その一部の條件をなしてゐはしなかつたかとも憶測せられる。

この場合に道長の藝術意欲といふことは、作品に換言して言へば定朝様式の創造である。同様にその諸堂莊嚴に従つた繪佛師に恩賞のないことは、彫像に於ける道長の意欲のより以上の充足を語るものである。私は康尙作品が如何なる様式であるかは具體的に明示できないが、しかし定朝作品への直接の進展上の系統を延くものであることを認めながらも、そこには定朝様式の康尙様式からの飛躍、即ち型態的完成を認めねばならない。そのことを少しく解説すれば、皇室の四圓寺と藤原氏の法性・法成二寺とは、當代に於ける貴族寺院の二型であつて（前掲論、氏論文）、前者が眞言宗的、法成寺は天台宗に屬する。しかし、道長の信仰精神は法華信仰に支配された淨土思想に即するものであると思はれる。阿彌陀堂に參つて佛を見奉り、無數の光明耀きて十方界に遍じ給ふとみて往生要集の文を思ひ出すものである（榮華物語、玉の臺）。ところで、この源心の淨土思想、彼の説く往生極樂の方便の中心である觀察門に於いては、佛の色相を觀察する別相觀・總相觀・雜略觀の三つの色相觀がある。（別相觀は佛の相好の細部から始めて佛身の各細部に及び、特に佛身の觀相を入念に行ひ、上から下、下から上と順逆十六回繰返し、かくすることによつて心想を明證ならしめ、最後に佛の白毫相を觀ずる。總相觀は佛身の總體について、（佛敎二ノ四、圭室謠）。この方便を中心とする道長以下當代貴族の信仰型態が佛教美術の表現内容を支配するのは必然であつて、即ちこの信仰精神の感覺的表現である佛像自體が、その意欲の充足として必要な表現を採らなければならないことは自明である。この時代的な表現内容を昂めて普遍的な一形式を創

造したものとして定朝の地位を求めることができる。吾々は平等院鳳凰堂阿彌陀像を想起すればよい。また田中豐藏先生の言の如く、阿彌陀像と堂内莊嚴或は堂塔或は自然との綜合的有機的構成をもつことも、その展開の一完成型式である。康尙から定朝への發展。定朝様式の完成的意味はそこにあると認められる。而して院政時代への定型としての流傳も亦そこに理由が存する。なほ定朝佛の具體的研究は、田中豐藏、丸尾彰三郎兩先生の二説に於いて詳しく論せられて餘すところがない。また定朝工房として佛師百餘名を指導して、短期間に多量の製作を完成しなければならない註文生産といふ技術的側面の事實と、それから生ずるであらう様式的特徴への制約、或は佛像丈量として丈六像の盛行といふこと、或は定朝の年齢の問題、或は定朝の晩年に於いてその青年期を育成されたであらうところの覺助・院助・兼慶、幼年期を同じくする圓勢、定朝歿する天喜五年には既に四十八歳である長勢、それらの佛師が復興法成寺や六勝寺建立の院政時代に於ける活動と定朝様式の傳統など、論すべき諸問題が多いが、何れも後稿に譲ることにしたい。